

【平成23年度】

～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～豊科編～

第3回



と き : 9月15日(木) 午後7時から

演 題 : 【自然の開発と近代豊科町の発展】

講 師 : 安曇野市豊科総合支所市民福祉課 課長

高原 正文さん

第3回「自然の開発と近代豊科町の発展」 H23. 9. 15

□はじめに 豊科町の由来と地理的環境

(町名の由来) 明治7年筑摩県権令永山盛輝(元薩摩藩士)が県内で一斉に強行した町村合併により誕生。**鳥羽(上鳥羽村、下鳥羽村の両鳥羽村は江戸前期まで鳥羽村という一つの村)、吉野(吉野村)、新田(新田町村)、成相(本村、成相町村。成相町村は本村の枝郷で中世まで成相郷という一つの村)の頭文字をとってトヨシナ**としたもの。漢字表記は豊科であるが、信州に多い坂がちな場所の地名○科(たとえば明科、仁科、妻科、更科)などとは違い全くの**合成地名**。合成地名の傑作としては昭和の大合併で誕生した旧若穂町がある(綿内村、川田村、保科村)がある。安曇野の近代教育の先覚者であり政治家(豊科村議会副議長、長野県議。自由民権運動家)であり、文人画家であった**藤森桂谷**(1835~1905)が考え出したという。

(豊科町誕生) 明治7年(1874)に成立した**豊科村は大正4年(1915)に町制施行**。昭和30年(1955)に大正時代から合併の気運があった南穂高村(昭和26年には豊科町と組合立豊穂中学開校)、高家村(昭和28年豊穂中学へ組合加入)、上川手村(昭和27年光の一部を中川手組合へ教育分村して豊穂中学へ組合加入)の1町3村で**新しい豊科町誕生(昭和30年1月15日)**。豊科村(町)役場は明治25年から66年間本吉町。昭和33年11月から成相に置かれ現在安曇野市豊科総合支所になっている。

(標高) 豊科総合支所の場所 555m、国道147号に掛る拾ヶ堰の橋 570m。

(面積) **39.11 km²**(平成2年まで 37.97 km²だったが三郷村との境界変更により現行面積)。昭和30年の合併前の豊科町はわずか **7 km²**にすぎなかった。

(河川) 犀川(千曲川の支流。梓川と奈良井川が合流する地点より北の呼称。長野市川中島で)、梓川。

(山地) 東山山地 光城山 911m 大口沢の奥の中谷では貝類を中心に海の生物の化石が大量に採集(多くは四賀化石館に)。**世界で最古とされるアシカ科の動物の化石**は大口沢手前の採石場から採集された(信州新町化石館に収蔵)。かつて此の地が海だったことを立証している。

(平坦部) 通称「安曇平」の中央部を占め、ほぼ拾ヶ堰から南は梓川扇状地末端、北は烏川扇状地末端としていいが、拾ヶ堰の流路周辺は両扇状地の複合扇状地の末端を形成している。細萱殿村、重柳の万水川右岸側には湧水地帯。環境省の日本名水百選「**安曇野わさび田湧水群**」に指定。昭和56年刊行の『長野県百科事典』から、水田は全耕地の94%を占め、**優良な安曇米の産地**として知られ、1反(10a)当り580kgの収量(昭和44年)だったことが知られる。**幕末には豊科の町部周辺にはまだ11町歩以上の林野を残しており、とくに新田神社から北周辺の地味豊かで耕土層が厚い土地の水田化が未着手の状態だった。**

(安曇野の象徴だったレンゲ草となつかしい原風景)

レンゲ草は幕末から「じょうめ草」の名で植えられ、かつて安曇野の米作に欠かせない肥料であった。レンゲ草でネックレスを編んだりレンゲの蜜を吸ったり、子どもの遊びにも欠かせなかった。

詩人尾崎喜八(1892~1974)は詩「安曇野」で穂高駅のホームから見た安曇野の情景をうたっ

ているが、南豊科駅のホームから見た情景も負けないくらいすばらしい。また似ている。南豊科駅では女学生が大勢乗り降りするし、**水田、屋敷林、常念岳**の眺めが実にすばらしい。その詩にうたわれたレンゲ草が実に印象的である。

安曇野

春の田舎ちいさい駅に
私を見送る女学生が七八人
別れを惜しんでまだ去りやらず佇んでいる。
彼女らのあまりに満ちた異性の若さと
その純な　こぼれるような人なつこさが、
私にはある圧迫をさえ感じさせる。
私はそれではなく風景に目をさまよわす。
駅のまわりには岩燕がひるがえり、
田植前の^{たんぼ}田圃の水に
鋤きこまれた紫雲英が浮いている。
そしてその温かい水面に、ようやく傾く太陽が
薄みどりの^{もや}靄をとおして金紅色に照りかえし、
白い^{ひも}綬のように残雪をかけた常念が
雄渾なピラミッドを逆さまにして映している。
絵のような烏川梓川の扇状地、
穂高の^{わさびだ}山葵田はあの森かげに、
彫刻家碌山の記念の家は
こちらの山裾にある筈だ。
いずこも懐かしい曾遊の地と
暮春安曇野のこの娘ら……
私の電車はまだ来ない

□自然の開発による近代化の事例をたどって

1. 拾ヶ堰の近代化による信州の穀倉地帯の出現

(1) 拾ヶ堰の概要

長野県の近世開削の代表的な堰(農業用水)として佐久の五郎兵衛新田用水とともに知られる。堰(せぎ)とは川の流れをせきとめて用水の水を揚げる仕掛けを指すのが一般的だが、**松本地方では農業用水そのものを堰という**。この地方独自の言い回しである。

拾ヶ堰は拾ヶ堰土地改良区(堰管理組合)の資料で**総延長 15 km**であるが、文化 13 年(1816)の開削当時は**全長 96 町(約 11 km)**としているので実際には 12~13 kmだったと推測されるが、昭和 37 年の富田新田開田のための分流開削、第二拾ヶ堰土地改良区による拾ヶ堰左岸側へのポンプ揚水により距離が延びたものである。

○堰幅　上流で 12m

○深さ 上流で 1.8m

○揚水量 a しろかき期 4/1～7/10 1秒間に 11.22 m³

b かんがい期 7/11～10/10 1秒間に 7.48 m³

c 非かんがい期 10/11～翌年 3/31 1秒間に 3 m³

○かんがい面積 1,002ha(水利使用許可面積)

水田面積 711ha(既設水田) 230ha(ポンプアップ等での開田)

○水利費負担(年間 10a 当り) 昭和 56 年(1981) 2,360 円 昭和 57 年(1982)2,400 円

(豊科町教育委員会『命の水』より)

近世安曇平最大の横堰である。横堰は河川からの豊富な水量による「押し流し」により等高線沿いに沿って通水する堰で、分水口を設けて水を分配していけば、縦堰と異なり**広範囲の土地の灌漑ができた**。また水の流れがゆるやかなため**温かくなった水を水田に供給でき**、稲の収量は縦堰(とくに烏川水系の冷たい水)に比較し格段によかった。ただし水流が緩慢なため堰底にどろやアオミドロがたまったりするので、**定期的に堰さらいをする必要**があった。



拾ヶ堰(中萱踏切付近から取水口のある東方松本方面を望む)

(2) 梓川の堤防改修とサイフォン化

開削当時から拾ヶ堰の最大のアキレス腱は梓川横断である。そのことは先行する横堰である勘左衛門堰でも同じである。開削当時の梓川の川幅は河川敷を入れ約 1 km にもなり横断には相当の苦労を強いられた。梓川と交差する水路部分を掘り、水路に沿って片土手を築き、梓川の水流部分は片土手を開けておき、牛柵を用いて塞ぐことで堰の水路を確保した。

しかしひとたび梓川が氾濫するとこの仕掛けはひとたまりもなく崩壊し、その都度関係する村々から人足が出て大規模に補修することを強いられた。

明治 20 年代から梓川にしっかりと連続する堤防を築堤する工事が続けられ明治 40 年代に今日のような堤防になり川幅も半分くらいに狭め、かつての河川敷の一部「川原田」などで水田化がはかられた。川幅が狭まった分梓川の横断部分の保持はしやすくなったとはいえるが、氾濫時に障

害が生じることに変わりはない。

梓川を伏越で横断したいとの陳情は大正5年(1916)から為されたが梓川伏越工事が完成しサイフォン化が実現したのは大正9年(1920)のことである。

(3) 拾ヶ堰に掛らない梓川水系の水争いの激化と赤松頭首工

豊科でも拾ヶ堰、勘左衛門堰といった横堰より南の下鳥羽の一部、上鳥羽、飯田、真々部といった梓川水系の縦堰に頼る村々は大正時代になってもしばしば水不足に悩まされた。上川有利、下川不利という現実がなかなか解消できなかった。

○大正13年(1924) 梓川の上川・下川の水争い

○昭和6年(1931)赤松頭首工完成

○昭和25年(1950) 梓川頭首工完成

○昭和52年(1977) 中信平総合開発事業完成 ⇒ 松本平最大の横堰の誕生

(4) 信州の穀倉地帯の農業用水の大動脈

昭和28年頃「南安の経済は米に始まり米に終わる」(『信毎年鑑』)と謳われた。

冬は天然リンクになりスケートを楽しむ子どもたちの姿が見えた。

(5) 都市化の進展と変わる拾ヶ堰の役割

農業用水から広域排水路へ

(6) 安曇野の景観に欠かせない拾ヶ堰

今日安曇野らしい景観に欠かせない拾ヶ堰といわれるが、拾ヶ堰がまだなかった時代、地味豊かな場所の多くがせいぜい畑で、たいがい原野や林であった。拾ヶ堰開削によって幕末までに耕地は8割増しになったが、古い農業技術や堰の改修の遅れなどで、明治になってからも開拓しきれない林野は多く安曇野に御殿林の狐など、林と狐がからむ伝説が多いのも、そうした情景を物語った。拾ヶ堰や他の堰の改修が繰り返され今日の水田地帯が広がった。この風景は人の手が加わったからこそ得られた風景といえる。安曇野らしい景観は自然に人の手が加わった景観といえる。

2. 湧水地帯を活用したわさび田造成と安曇野わさび栽培の歴史

(1) わさびの概要

① わさびの種類と違い

沢わさび(水わさび) 長野県内のわさび栽培の主流をなす。風味的に最も優れている。わさび漬にされるが、香辛料の価値が高く薬味として根茎をすりおろす「生わさび」として活用される。

畑わさび 信州新町で栽培。冷涼な山林の中にわさび畑をこしらえ栽培。香辛料の点では沢わさびに劣るので、わさび漬、練りわさび用に使われる。

わさびだいこん(ホースラディッシュ) 別名「西洋わさび」。大根と同様根が発達。粉わさび用。

ゆりわさび 山陰地方に見られる。商品化には向かない。

アイヌわさび 北海道で見られるが商品価値はない。

② 安曇野にあるわさび栽培地は「わさび畑」か「わさび田」か、について

③ 石つくり法と砂つくり法



御法田のわさび田で見られる「石つくり法」

(2) 豊科町重柳における梨畑からわさび田への転換

① 豊科の重柳のわさび田がある一帯は地下水が湧く湿地帯で江戸時代には刈敷場で柳など繁茂。



② 明治 2、3 年ころ刈敷場であった湿地帯に地元山崎某が梨を栽培し始めた。



③ 息子山崎代作が大阪から梨の苗を取り寄せ梨の栽培を本格化したが、地下水位が高く絶えず病気が発生。必ずしも安定した収穫とはならなかった。一方で時期不明だが山崎代作は梨畑の一角に北アルプスの野生のわさびを栽培しはじめた。



④ 重柳の別の梨農園で明治 40 年ころ自家用にわさびを植えたところ思いのほか生育がよいばかりか品質もよかったので商品化の動きになった。明治末年の状況は梨畑、わさび田が混在、穂高では梨畑、わさび田に加え葡萄園まで混在する状況だった。



⑤ 安曇野わさびは大正 3 年の大正博覧会で評判となり、大正 4 年の信濃鉄道開通もあって東京方面への出荷がこのころ始まったようである。現在の御法田のわさび田の造成もこのころ着手された。



⑥ 大正 12 年の関東大震災により伊豆・静岡産のわさびが大打撃を被る。



⑦ 大正末年から昭和 2、3 年にかけて梨畑を廃してわさび田に変えるものが続出

(3) 関東大震災がもたらした安曇野わさびの隆盛 柏矢町駅のフル稼働と穂高花柳、柏矢町花柳の繁栄

3. もうひとつの「水」の世界-豊科市街における花柳界の出現とその盛衰

(1) 花柳界のしくみ

① 豊科は二業地か三業地か

(2)発生の経緯と穂高禁酒会

「明治 10 年代の後半から近郊に蚕種業が勃興すると、豊科市街地は繭や蚕種仲買の中継地となり、諸官庁の設置の状況とも合わせ、成相の旧郷倉周辺の「上町原耕地」に急速に花柳界が形成されていく。(中略)字町頭南の花柳界の方は「うろたえ橋」を日常・非日常の境界として成相商店街に接続、「歓楽街」の趣を呈するに至る。花柳界の形成は穂高に先んじており、穂高の常盤町に通称「狐小路」の花柳界が勃興するのはこれよりあとのことである。(中略) 穂高の料理屋の有志たちが商売繁昌を目的に豊科警察署長経由で芸妓設置許可願いを県へ提出したのは明治 27 年 3 月のこととされ設置反対の禁酒会(東穂高禁酒会)の面々は既に成相新田にあるので穂高に芸妓は不要としている。安曇節の歌詞「ととん豊科太鼓や鼓、続く下堀藁きぬた」ではないが、まさに勤労にいそしむ豊科村の農村地帯のただ中で、ひとり成相新田のいわゆる町部だけが急速な発展を遂げる。」

高原小稿「安曇野市中心市街地の近代史<上>」より

(3)大正期の豊科花柳最盛期

①うろたえ橋周辺は豊科最大の歓楽街だった。大正 9 年ころの最盛期、料理店 70 軒、芸妓 81 人。

(4)豊科調安曇節の道場豊科花柳と日吉屋金時

(5)戦後の民謡運動に果たす芸妓花小春の役割と豊科小唄

(6)昭和 35 年という転換点

①日本を席捲したレジャーブームとお座敷遊びの衰退



現在のうろたえ橋付近

(7)花柳界が消滅後の元芸妓たちの進路 → 豊科にやたら多い小料理店、居酒屋

(8)増田小夜『芸者』と居酒屋「どん底」開業

映画「からたち日記」は増田小夜(塩尻郷原出身)の苦闘の半生を綴った『芸者』の映画化・主題歌「からたち日記」は島倉千代子(映画にも出演)で大ヒットした。増田小夜は芸妓のときにいたことが

ある豊科に戦後、豊科時代の先輩芸妓の伝手で落ち着く。苦労の末居酒屋「どん底」を開業。結局豊科の地が彼女の終焉の地となる。結婚もし「どん底」をやめたあと、幸せな人生を送ったといわれる。

(9)伝えたい料芸祭りの伝統

料芸とは料理店と芸妓置屋の二業のこと。

昭和 30 年代は豊科公園が桜の名所だったので桜の満開のもとで料芸祭りを開催。まだ芸妓が 20 人くらいおり 10 軒くらいは芸妓置屋があったので文字どおり「料芸」だった。その後、一乗寺平和祈念堂前の広場へ会場を移すようになってからは「芸」なき「料芸」の祭りとなったが、ある時期までは元芸妓が経営していた料理店も「料芸」に名を連ねており嘗ての雰囲気をよく伝えていた。今は園遊会という雰囲気である。

4. 明治後半から大正時代にかけて原野へ新しい町並の出現

(1)明治 35 年の田沢駅開業と田沢街道敷設

(2)信濃鉄道敷設と原野の中に大正 4 年開業した豊科駅と駅周辺の発展

①信濃鉄道敷設の経緯

②豊科駅開業と駅前集落の形成

③続々生まれた新しい町名

(3)高家村梓橋の駅前集落の出現

(4)高家村熊倉柳原に出現した大正町と製糸工場

5. 豊科町の町部への上水道敷設

(1)必要に迫られた水道敷設

(2)豊科町部に限られた昭和 6 年の水道敷設

(3)戦後、豊科農村部に水道敷設

6. 豊科市街地東郊の不毛の地「東原」と西郊の穀倉地帯「西原」の開発

(1)東原

○東原

かつて水田、桑畑、それに伝染病院しかなかった字「東原」(成相田にまたがる)の地は豊科市街からすれば完全な郊外だったが、昭和 30 年代の都市計画街路整備により開発が進み新市街地が出現。いまや安曇野市を代表する街区になろうとしている。

①明治期、桑畑の中に伝染病院や火葬場がポツンとあるだけだった未開発地

②豊科赤十字病院

③豊科中学校(最初の校名は豊穂中学校)の建設

④都市計画街路の整備と東原の都市化

都市計画道路「駅通り線」は昭和 31 年度末から着工。豊科駅から糸魚川街道に至る通称八千代町の通りは昭和 31 年まで丸山俊八宅で行き止まり、都市計画上、市街地を東方へ拡幅できない事態となっていた。昭和 28 年には都市計画が練られていたが駅通り線を整備して田沢駅までつなげるという構想は昭和 30 年の新豊科町合併により急速に現実のものとして具体化された。



安曇野市役所の所在地に決まり新「中心街区」への発展が見込まれる東原

当面 5 ケ年計画で豊科駅から日赤病院前まで道路を敷設、駅前広場を造成、さらに駅通り線を東方へ延伸するという計画に着手。しかし用地交渉の問題で豊科駅前広場の完成は昭和 45 年と遅れた。駅通り線が田沢駅までつながったのはようやく昭和 56 年のことである。

駅通り線の効果として公共施設や主要銀行の本通りからの東原の都市計画道路沿いに移転。豊科警察署、豊科郵便局、長野地方法務局豊科出張所、八十二銀行豊科支店。それに昭和 35 年以後宅地造成が進み見岳町などの住宅地が出現。

⑤松本電鉄豊科営業所東に新田東原団地造成

(2)西原

①製糸工場の立地

成相・新田最良の美田地帯 6 万坪の消滅と呉羽紡績開業

7. 都市化の進展と線引の導入

戦後の豊科町の歴史は「都市計画」の歴史といっても過言でない。市街化区域と市街化調整区域の設定は景観に何をもたらしたか。

8. 長野自動車道がもたらした周辺環境の変貌

(1)インターチェンジ

(2)高速道関連圃場整備

□近代現代の全体的な歩みは別添の年表をご参照ください。

豊科町近現代年表

年 (西暦)	記 事
明治4年 (1871)	3月、藤森桂谷、青年教育のため高橋白山を招き法蔵寺正授軒に実践社(私塾)を開設する。
明治5年 (1872)	8月、地券発行のため田畑一筆限地引帳・田畑見取絵図を作成。この年、各村で壬申戸籍を作成する。
明治7年 (1874)	10月、筑摩県(明治4年廃藩置県)の方針により成相町村、新田町村、本村、吉野村、上鳥羽村、下鳥羽村が合併して豊科村が、細萱村、踏入村、重柳村、寺所村が合併して南穂高村が、熊倉村、中曾根村、飯田村、小海渡村、真々部村が合併して高家村が成立する。
明治8年 (1875)	1月、筑摩県の方針により田沢村、光村が合併して上川手村が成立する。
明治9年 (1876)	3月、豊科学校の新校舎が落成する。この年、各村で改正地引帳が作成される。
明治12年 (1879)	1月、安曇郡が南北に分かれ、南安曇郡役所が豊科村新田に開庁する。3月、成相新田郵便取扱所開設。
明治13年 (1880)	この年、寺所の宗教家岡村卓一が有明講を起こす。
明治15年 (1882)	この年、細萱の飯沼甚蔵(本光館)が蚕種業を始める。
明治16年 (1883)	1月、成相で商業振興のため、市神祭り(初市)を始める。
明治17年 (1884)	1月、新田でも成相に倣い市神祭り(初市)を始める。
明治18年 (1885)	12月、松本警察署豊科分署(明治23年に豊科警察署と改称)が設置される。
明治20年 (1887)	2月、松本治安裁判所豊科登記所が設置される。4月、信濃銀行豊科支店が設立される。同年、相生座開業。
明治21年 (1888)	この年、豊科村の農村部(吉野、本村、上鳥羽、下鳥羽)から分村運動が起こる。
明治22年 (1889)	4月、町村制による豊科村、南穂高村、高家村、上川手村が発足する。この年、すでに蚕種取引の中心地になっていた町部に19軒料理店が営業しており、花柳界による成相の繁栄がこのころから始まる。
明治23年 (1890)	この年、梓橋が架橋となり、新糸魚川街道が開通する。
明治24年 (1891)	12月、南安曇郡役所新庁舎落成。
明治25年 (1892)	8月、豊科村役場落成。10月、豊科村外四か村組合高等小学校が設置される。
明治27年 (1894)	4月、成相新田の大火で町並みの大部分を焼失。7月、登山家ウェストン、豊科通過(大火からの復興の様子を著書『日本アルプス』に「不死鳥のように今その灰の中から立ち上がろうとする」と記す)。
明治28年 (1895)	この年、豊科村外3か村衛生組合が発足する。
明治30年 (1897)	9月、豊科村で赤痢が流行する。12月、南安銀行が設立される。
明治31年 (1898)	この年、蚕種検査法にもとづき豊科蚕種検査所(翌年、南安曇蚕種検査所と改称)が設置される。
明治35年 (1902)	2月、篠ノ井線田沢駅開業、同駅と豊科村新田を結ぶ田沢街道が開通する。
明治40年 (1907)	5月、吉野の丸山団衛、競によって秋蚕専修学校が設立される(その後大正7年日本蚕業学校と改称)。
明治43年 (1910)	3月、屠畜場が豊科村営となる。
明治44年 (1911)	12月、会田血涙が成相において月刊雑誌『信濃不二』を発刊する。
大正元年 (1912)	この年、株式会社豊科冷蔵庫が設立され天然氷による蚕種貯蔵を始める。
大正3年 (1914)	11月、豊科村議会が芸妓納税組合の設置を議決。12月、豊科村に市内特設電話が開通する。
大正4年 (1915)	1月、信濃鉄道が豊科まで開通し豊科駅が開業する。4月、豊科村が町制施行し豊科町となる。花柳界が絶頂期を迎え始めたこの年、町内の料理店数は75軒、芸妓数は72人を数える。
大正8年 (1919)	9月、南安曇郡役所の新庁舎と南安曇郡の公会堂が完成。この年、池田・豊科・松本間のバスが開通する。
大正9年 (1920)	4月、南安曇農学校開校。5月、十カ堰のサイフォン工事が完成。同月、豊科商業会が発足する。
大正12年 (1923)	4月、豊科高等女学校開校。
大正13年 (1924)	この年、未曾有の旱魃(かんばつ)となり、上鳥羽と下鳥羽で被害が甚大となる。
大正14年 (1925)	5月、入山製糸場が操業を開始。この年、郡制廃止(大正11年)により南安曇郡役所が廃止される。
大正15年 (1926)	この年、商業会が「愛町株」発行で招致した甲信明社(製糸)が操業開始。
昭和4年 (1929)	4月、共栄社豊科工場(製糸)が操業を開始。
昭和5年 (1930)	12月、豊科町にカフェーが大勃興する。この年、豊科商業会が商工会となる。
昭和6年 (1931)	11月、豊科町に初めての上水道が竣工し成相と新田に給水を開始する。
昭和8年 (1933)	5月、丸合生糸共同荷造所が新設される。7月、新しい豊科屠畜場の竣工式が行われる。
昭和11年 (1936)	10月、成相商店街うろたえ橋の酒井屋洋品店、笠井菓子店が豊科町のネオンサインのトップを切る。
昭和12年 (1937)	2月、満洲移民100万戸送出計画にもとづき豊科町からも移民を出す。3月、豊科町と呉羽紡績との間で正式契約締結。4月、呉羽紡績の子会社豊科紡績の工場着工。
昭和14年 (1939)	この年、呉羽紡績の子会社豊科紡績の工場が開場する(従業員538人)。
昭和15年 (1940)	この年、企業整備による保証責任安曇蚕種共同施設大進社(安曇蚕業の前身)が新田に創立される。
昭和16年 (1941)	5月、豊科紡績、呉羽紡績豊科工場となる。同月、高家村で西田幾多郎詞碑除幕(碑陰では「十五年十一月」)。
昭和18年 (1943)	6月、初の工場疎開として旭金属工業株式会社の豊科工場が共栄社の施設を買収して設置される。11月、日本蚕糸製造株式会社が創立され、製糸業はこれに一歩本質化される。
昭和19年 (1944)	8月、呉羽紡績外2社の合併により大建産業が創立され、呉羽紡績豊科工場が大建産業豊科工場となる。
昭和20年 (1945)	4月、大建産業豊科工場の施設が陸軍製絨廠に貸与される(8月の終戦まで)。

昭和21年 (1946)	5月、安曇蚕糸農業協同組合連合会発足。この年、大進社が解散、安曇蚕業株式会社が創立される。
昭和23年 (1948)	3月、豊科自治警察発足。この年、株式会社細川製作所が旭金属の敷地の一部を買収して発足。
昭和25年 (1950)	3月、呉羽紡績が大建産業より分離独立。8月、豊科町と南穂高村が中学校組合を結成する。
昭和26年 (1951)	4月、豊穂中学校開校。9月、豊科自治警察が住民投票により廃止決定 (10月1日廃止)。
昭和27年 (1952)	7月、光の一部を除く上川手村が豊穂中学校組合へ加入 (翌年3月には高家村も加入)。
昭和28年 (1953)	3月、豊科町工場誘致条例施行。4月、町立豊科保育園開設。同月、豊科電報電話局開局。
昭和30年 (1955)	1月、豊科町、南穂高村、高家村、上川手村の田沢、光の野田、南村、蟬が合併して新豊科町成立。3月、第2水道完工。4月、豊科中学校発足。9月、四賀村飛地の高萩を豊科町へ編入。11月、第1回町民運動会開催。
昭和31年 (1956)	7月、第3水道完工。8月、豊科小唄ができる。11月、第1回公民館総合文化祭が開催される。
昭和32年 (1957)	3月、都市計画街路事業第1期工事が始まる。11月、豊科警察署が現在地へ移転新築落成。
昭和33年 (1958)	8月、第4水道完工。10月、田沢・大口沢間の定期バスが運行を開始する。11月、豊科町役場新庁舎落成。
昭和34年 (1959)	9月、宅地造成分譲条例を制定、住宅施策と工場誘致を推進し始める。
昭和35年 (1960)	4月、工場誘致推進のため町長直属の商工建築係を新設。同月、第5水道完工。
昭和36年 (1961)	3月、工場誘致条例を全面改正する。6月、都市計画事業により豊科駅前道路 (駅～国道) の拡張が決まる。
昭和37年 (1962)	7月、県企業局により新田住宅団地63戸の分譲造成着工。9月、町全域が都市計画区域に指定される。
昭和38年 (1963)	1月、中学校敷地に給食センターが新築落成する。2月、有線放送施設が完工、通話を開始する。
昭和39年 (1964)	5月、消防本部を設置し常備消防職員を配置。7月、「広報とよしな」発刊。12月、消防本部庁舎落成。
昭和40年 (1965)	3月、郡内の15農協が合併してあづみ農協発足。11月、大黒屋北～役場前の町道を舗装 (町道舗装第1号)。
昭和41年 (1966)	3月、文化財保護条例制定。4月、消防本部に消防署設置。9月、豊科町・三郷村の町村境界変更を議決する。
昭和42年 (1967)	3月、あづみ農協会館新築落成。7月、公民館・福祉センター・勤労者福祉センターが新築落成。
昭和43年 (1968)	7月、豊科保健所の改築落成。10月、田沢橋西詰にアルプス団地の造成を着工。
昭和44年 (1969)	4月、豊科南小学校開校。6月、細萱ごみ焼却場を廃止する。9月、都市計画審議会を設置する。
昭和45年 (1970)	3月、都市計画による豊科駅前広場が完成。10月、国勢調査で豊科町の人口が2万人を超す (20,046人)。
昭和46年 (1971)	5月、都市計画法による市街化区域・市街化調整区域の線引が行われる。7月、豊科北小学校開校。
昭和47年 (1972)	4月、南安曇郡消防組合が発足。5月、アルプス霊園の完成式が行われる。
昭和48年 (1973)	2月、豊科町商工会館新築落成。4月、アルプス区が発足。同月、大口沢簡易水道の給水を開始する。
昭和49年 (1974)	3月、農業振興地域整備計画を策定。同月、工場誘致条例を廃止。
昭和50年 (1975)	2月、アルプス団地が完成する (町営77戸、県営218戸、分譲350戸)。10月、役場に同和対策室新設。
昭和51年 (1976)	11月、豊科町公民館が全国優良公民館として文部大臣表彰される。
昭和52年 (1977)	3月、上ノ山林道全線完工。5月、上ノ山登り窯跡の発掘調査 (豊科高校地歴部ほか)。11月、解放館落成。
昭和53年 (1978)	3月、老人福祉センター落成。5月、重柳の県民運動広場が完成する。11月、中央公園が完成する。
昭和54年 (1979)	3月、学校給食センター移転新築落成。4月、広域豊科葬祭センター落成。6月、豊科町郷土博物館開館。
昭和55年 (1980)	3月、真々部配水場が完成。4月、たつみ原区発足。同月、新田沢橋が完成。8月、町民プール完成。同月、第1回あずみ野祭りが行われる。12月、第1回安曇野コンサートが開かれる。
昭和56年 (1981)	2月、中央道の豊科地区中心杭打ち式挙行。5月、下鳥羽に家庭雑排水処理場が完成。
昭和57年 (1982)	3月、新県道の東町通り交差点から田沢橋西交差点までの区間が完成し供用開始。4月、豊科東小学校開校。
昭和58年 (1983)	10月、豊科土地区画整理事業完工。11月、県営園場整備事業の川手地区と高家地区の起工式挙行。
昭和59年 (1984)	7月、飯田地籍における松本市との境界確定調印。11月、県営園場整備事業南穂地区起工式挙行。
昭和60年 (1985)	1月、重柳で新農構自然活用型の起工式。12月、白鳥5羽が犀川ダム湖に初飛来。
	3月、あづみ野ガラス工房完成。4月、中学校2校制スタート。7月、わさび田湧水群が環境庁より名水百選のひとつに選ばれる。12月、県営園場整備事業南穂高地区起工式挙行。
昭和61年 (1986)	3月、南安曇地方事務所閉所。9月、第1回安曇野ジャズコンサートが行われる。
昭和62年 (1987)	3月、上ノ山のゴルフ場予定地の発掘調査をするため東山遺跡調査会が発足する。同月、ビレッジ安曇野開設。11月、豊科町が武蔵野市と姉妹都市盟約調印。
昭和63年 (1988)	7月、プラザ安曇野開設。8月、長野自動車道豊科インター開通。同月、熊倉・柳原区画整理事業の竣工式が行われる。9月、アルプスハイウェイフェスティバルが開催される。10月、役場に電算機を設置。
平成元年 (1989)	5月、東山のゴルフ場の建設工事完了。6月、豊科町がクラムザッハと友好都市盟約調印。
平成2年 (1990)	7月、田淵行男記念館開館。9月、県営園場整備事業川手地区竣工式。10月、県営園場整備事業豊科南部地区起工式。11月、光城山に白鳥イルミネーション設置。
平成3年 (1991)	5月、県立こども病院起工式挙行。9月、下鳥羽区画整理事業完工。10月、県営園場整備事業南穂高地区竣工式。11月、県営園場整備事業高家地区竣工式。12月、温泉掘削竣工式挙行。
平成4年 (1992)	2月、犀川安曇野流域下水道が都市計画決定。4月、豊科近代美術館開館。12月、湯多里山の神オープン。
平成5年 (1993)	3月、保健センター竣工式。10月、豊科町がクラムザッハと姉妹都市盟約。12月、下水道終末処理場調印。
平成6年 (1994)	3月、デイサービスセンター竣工式。8月、第1回町民ゴルフ大会開催。
平成7年 (1995)	9月、全国名水シンポジウム開催。この年、町村合併40周年を記念して各種の記念事業が行われる。